

ガタ(片倉胖)を偲ぶ

早稲田大学ラグビー部監督／元日本代表チーム監督 日比野弘

早大南門前にあるレストラン『高田牧舎』は、私とガタの思い出の場所でもある。ここは早大ラグビー部の連絡所にもなっていて、受験から合格発表まで二人で何回も訪れた場所だ。私は今でもこの店から、窓越しに早咲きの桜を見るのが好きだ。合格発表の頃は、悲喜こもごもの人生を垣間見ることもなる。肩を落として悄然と歩く学生には、抱きしめて頑張れよと言ってやりたくなる。目の前の電話に飛び付く学生の身体全体から合格の喜びが沸き出ている。その電話先には、嬉しさに嗚咽している母親の顔が見えるようだ。

新入生の顔はどれも輝いている。目標を達成した誇りと、ちょっぴり不安そうな初々しい姿に魅力がある。その姿に、ガタと私の早大入学当時の思い出が重なる。高校時代は、ライバルで、千歳高校のガタの巨体を生かした突進には、私の大泉高校は散々苦しめられた。そのガタが、東京高校代表で愛媛の国体に出場したときから、私の心強い味方になってくれた。ガタというあだ名はいつ誰が付けたのかは定かではない。多分ガタイがでかいことと片倉のカタを引っ掛けたものと思うが、ラグビー界ではずっとガタで通ってきた。私もこのほうが親しみがもてるので、以下ガタと書かせてもらおう。

ガタと早大ラグビー部の練習に初参加したときの、不安と期待が交じった複雑な気持ちを今も鮮明に思い出す。午後2時練習という連絡を受けた私たちは、15分前にグラウンドにいった。「しまった、練習時間を間違えた」。と思ったのも無理はない。すでにグラウンドには50名くらいの先輩たちが走り回っていたからだ。だが、

私たちが時間を間違えた訳ではなく、全員がレギュラーポジションを取るために、人より早くグラウンドへ出たのである。ガタと私は、早大ラグビー部が激しい競争の世界であることを、入部した日に教えられたのである。

早大ラグビー部の厳しさを植え付けられたガタと私は、ひた向きに努力し、新人の時からレギュラーとして試合に出場することができた。ガタは私より早く、シーズン2戦目の東大戦で初出場を遂げ、私は3戦目の京大戦でデビューすることができた。ガタの初ポジションは何と右プロップであったが、プロップはこの試合だけで、次の京大戦からはロックに定着した。

大学4年生のときは、キャプテンのガタをバックスリダーの私がサポートする形となった。卒業後は、日野自動車に入社したガタと東横百貨店に入った私は、またライバルとして社会人の東京代表の座を争ったが、関東代表、日本代表などでは、いつもガタと一緒にプレーすることができた。

ガタの日本代表初キャップは、昭和33年3月2日、福岡の平和台で行われたオールブラックスジュニアとの第1テストであった。3月9日の花園での第2テスト、3月23日の秩父宮での第3テストには、私もガタと一緒に出場したが、ここでもガタには一歩先んじられている。ガタはこのあと、昭和34年3月22日のカナダとの第2テスト、10月4日のオケ大連合とのテストマッチに出場した。テストマッチがまだ少なかった当時では、キャップ5は文字どおり日本を代表するラグーマンの証明である。

私のラグビー人生は、ガタの後を追って走り続けて

きたというのが実感である。

ガタはテレ屋で、女性を口説くのは苦手だったが、奥さんの多津美さんには一目惚れして、ラグビーの猛突進しながら強引に口説いたらしい。多津美さんの愛を勝ち得たときは興奮して「御茶ノ水から吉祥寺まで二人で手をつないで歩いた」。という嬉しい話を聞いたのは三地域対抗の試合の夜だった。結婚披露宴を秩父宮のクラブハウスで行ったが、司会の私が新婚旅行はどこに行くんだと聞くと、「お前が手配してくれているんじゃないのか」と言われたのには驚いた。まったく豪放磊落、スケールの大きい男だった。

そのガタがこともあろうに人生のゴールラインまで、私を残して先に走り抜けてしまった。平成7年3月6日、まだ60歳の若さだった。二度と会うことの出来ないノーサイドの別れは辛く苦しい。私は、決して戻ることはない二人の若き日を思い出し、涙が溢れて弔辞の言葉を続けられなかった。

ラグビーをやっていて何がいちばん良かったかと聞かれれば、迷うことなく答えられるのは「ノーサイド精神のお陰で、素晴らしい友人がたくさん出来たこと」である。それだけに友人との別れの悲しさは、人一倍大きいのかもしれない。

私は冥途へ行ったら、またガタと同じチームでラグビーをやろうと思っている。



故 片倉氏